けいおん×マギカ

彼方こなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けいおん×マギカ

【Ｎコード】
Ｎ７２６０Ｘ

【作者名】
彼方こなた

【あらすじ】
私立桜が丘高校に入学してきた中野梓は軽音楽部に入部する。
憧れと期待、そして不安を抱えた彼女が入部したそこは自分の思いからかけ離れた活動をしていた。
お茶を飲んで、おしゃべり――練習はほとんどしない。
そんな現状を良しとしない梓は、ある日奇妙な生物に出会う。
生物の名はキュゥべえ。
梓を魔法少女にするために来た使者だった――。

プロローグ／魔法少女ってなんですか？

「あれ、誰もいない……？」

一日の授業が終わって音楽準備室を訪ねると、いつもならいる先輩方の姿が無かった。

朝練習のときに遅れるという話は聞かなかったし、急な用事でも出来たのだろう。

私はそう結論付けて、むったん（エレキギター）の入ったケースを壁に立てかけて教科書が入ったカバンをその横へと置いて、ソファに座る。

入部してから今日で一週間。

そろそろ部の雰囲気に鳴れてきていい頃合いだけど、あのグダグダなお茶の時間だけは許せなくて、ついつい怒ってしまい、結果的に先輩方との距離が離れているように感じる。

……こんなはずじゃなかったのになぁ。

新歓ライブで先輩方の演奏を聞いたときに得た感動。心が弾み、自分もあの音の中に混ざりたいという気持ちが薄れてしまっていくのが自分でわかる。

今ではどうしてあんな感動を覚えたのか疑問で、自分がこの部に入った動機さえ信じられなくなっている。

だから、今日こそは頑張ろう。

何を？　と聞かれても答えられないけど、ただ精一杯やりたいという想いがある。

とりあえずは、練習を始めるところから。

お茶の時間も大切だっていうのは判っている。先輩方がそれを糧にして頑張っているのもこの目で確認したし、私だって甘いものは好きだ。特にたい焼き。

「ああ、ムギ先輩また用意してくれないかな」

思わず、そう声に出てしまった。
慌てて口を両手で隠すように塞いで周囲を見渡す。
当然、誰もいないし聞いていない。
私は安堵して、うな垂れた。
……毒されてる。
先輩方に付き合っている間に私も部の雰囲気に馴染んでしまったようだ。
クラスメイトである憂に私が変わってしまう事を相談したことがある。その回答は「肩の力が抜けるっていいことだよ」とのことだった。
確かにその通りなんだけど、肩の力も抜きすぎるとこんにゃくみたいに芯がないだらーとした駄目人間になってしまう。
ここにいる先輩方がそうだと言っているわけじゃないけど、たぶんこのまま何もしないでいるとそうなってしまうんだろうなと思った。
だから、私は自分に活を入れようとして気付く。
「練習しなきゃ」
なんでソファに座ってまったりしてるんだろう。これこそ毒されてしまった証拠だ。先輩方が来たときにこんな姿を見せれば、確実に「お茶にしましょう」と言われるに違いない。
それだけは避けなければ！
立ち上がり、壁に立てかけたケースを手に取る。
いや、手に取ろうとしたところで奇妙なものを見て立ち止まる。
「……なにあれ」
先輩方とお茶をするときに使用する四つの学校机を集めて作ったテーブルの上に白くてふわふわしてそうなぬいぐるみ？があった。
先輩の中の一人――たぶん唯先輩が持ってきて置いていったものだろう。私物の持込は最低限にって澪先輩も注意していたのに……。
私はぬいぐるみを手にとって抱きしめる。
予想通りふかふかだった。

尻尾みたいな部分が妙に気持ちいい。それに何か生きているみたいに温かかった。
「誰のだろう？」
抱き心地がとても良い。一緒に寝たら安眠間違い無しだ。
欲しくなる。でも、これはたぶん誰かのもの。
どこで買ったのか聞いてみようか、そう思ったときだった。
「あまり強くされると痛いよ、中野梓」
「え……？」
ぬいぐるみの赤くて丸い瞳が私を見ている。
一瞬、喋ったように聞こえたのだけど……気のせい？
いや、
「だからもう少し優しくして欲しいんだ、梓。聞こえているかい？」
喋ってる。
これ、喋ってるよ！
なんで？　ぬいぐるみの中には押すと鳴いたり録音してあるボイスを発するものがあるけれど、この子は私の名前を呼んだ。ということは、唯先輩が予め登録しておいたボイスだったってこと？　ありえる。私を驚かせようと昼休みにここに置いていったんだ。
「なんだそういう機能なんだ」
私はそう納得して、ぬいぐるみの頭を撫でる。
と、ボイスが再生される。
「……認めないんだね、中野梓」
あまり可愛いくないボイスだけど、そこは唯先輩のセンスだからかな？
ただ感触は最高なので、手放す気にはなれない。
そうして、私がしばらくぬいぐるみのふかふかを堪能していると、
「よーす、梓来てるかー？」
先輩方がやってきた。
「っあ！　あずにゃん、その子？！」
音楽準備室に入ってくるなり私に駆け寄ってくる平沢唯先輩。先

輩の髪は茶色で、天然パーマらしく毛先が跳ねている。前髪に刺してある黄色い髪留めが特徴だ。また、顔はくりくりとした瞳が小動物を思わせて愛くるしくて、なにより頬っぺたが柔らかいのだ。
触感で言えばこのぬいぐるみと勝るとも劣らずといったところ。
「ちょっと感触が良くて抱いちゃってました、唯先輩のですか？」
目の前にやってきた唯先輩にそう尋ねる。
しかし、答えたのは唯先輩じゃなくて。
「ボクは唯の所有物ではないよ。そろそろ離してくれるとありがたいのだけど？」
ぬいぐるみだった。
こんなボイスまで用意されているなんて驚きだ。
「すごいですね、このぬいぐるみ。現代科学の進化を感じます」
「いや、えと……あずにゃん、それはね……」
「唯、君からも頼むよ。この子現実を見てくれないんだ。ボクがずっと話しかけているのに応じてもくれない。失礼な人だよ、まったく……」
唯先輩が口をパクパクさせて、両手の指を組んだり離したりしている。何か私に言いたい事があるのだろうか？　ならはっきりと言ってくれればいいのに。
「どうかしたんですか、唯先輩」
唯先輩は少し悩んでから告げる。
「それ、本物なの」
「本物？」
「うん、生き物ってことだよ」
「生物？」
「そう、なまものなの」
「私こんな生き物みたことないですよ？　騙されませんから」
「えっと、それはね……」
唯先輩が説明しようと口を開いたとき、他の先輩方がこちらへやってくる。

「なに話してるんだ……ってキュゥべえじゃないか」
「ほんとだ、キュゥべえがなんでここにいるんだよ」
「まあ、キュゥべえもお茶をしに来たの？」
澪先輩、律先輩、ムギ先輩はそれぞれ声をあげた。
みなさんこの生物？を知っているようだ。
よく状況が判らないが、一つだけ把握できた。
それはこの子がキュゥべえという名前らしいということ。
「この子、キュゥべえって生き物なんですか？」
「そうだよ、私たち魔法少女の使い魔的ポジションのキャラクターさ」
律先輩はそう言った。
「……魔法少女？」
なにそのメルヘンな存在。というか私たちってどういうことだろ。
「うん、あずにゃんにはまだ言ってなかったね。私たち全員魔法少女なんだ」
「……意味わからないです」
とうとう唯先輩は変な電波を受信できるようになってしまったのだろうか。けど、他の先輩方もそうだし……どういうこと？
私は抱いたぬいぐるみ――キュゥべえに視線を向ける。
「理解したかい、中野梓。ボクは君にお願いがあって来たんだ」
「お願い？」
「そう、ボクと契約して魔法少女になってほしいんだ」
その言葉に周囲の先輩方は騒ぐ。
「おぉ、中野も魔法少女に選ばれたか！」
「……よく考えてから決めた方がいいぞ」
「お茶にしてゆっくり考えましょう？」
なんだろう。私の知らないところで勝手に話が進んで言ってるような気がする。
魔法少女ってなに？
契約って？

私はそれぞれの席に着いてお茶とお菓子を待つ先輩方に問いかける。

「えと、魔法少女ってなんですか？」

プロローグ／魔法少女ってなんですか？（後書き）

初めまして＆こんにちは、彼方こなたです。
この度はこのような駄文を読んで頂きありがとうございます。
誤字脱字、技術指南、その他感想など頂ければ幸いです。

第一話／そんなの、絶対だめ

魔法少女とは奇跡と引き換えにキュゥべえと契約を結び、魔女と戦う運命を課せられた存在……らしい。

音楽準備室の一角。いつものようにお茶会を行う面々。ただ一つ普段と違うことをあげるなら、テーブルの上にはお菓子とお茶以外のものがあること。

それは話にあがったキュウべえという謎生物。

私は先輩方が口にする『魔法少女』と『キュウべえ』がどういったものなのか尋ねたところ、返ってきた言葉は御伽噺のような設定だった。

「つまり、私たちは奇跡を対価に魔法少女になったんだよ」

律先輩は語る。

「願い事をなんでも一つ叶えてもらった代わりに、このキュウべえって生き物の手伝いをしている。ただそれだけのこと」

いつもふざけているのにこういう風にしっかり説明されると、ギャップもあって先輩の好感度がちょっとあがった気がする。

ちょっとだけだけど。

「ねえ、あずにゃんは何をお願いするの？」

「……特に決めてません。それにまだ私信じていないですから、魔法少女とか魔女とか」

「梓は頑固だなー。順応しなきゃやっていけないぞ」

「律先輩のは大雑把って言うんですよ」

「っく、言うじゃないか！」

「けど、事実だな」

「なっ！？　澪まで納得するのかよ……ひでぇ。私たち長い付き合いじゃんかよー。もっとフォローがあって然るべきじゃないか」

「じゃあ、もう試験勉強で泣きついてくるなよ。順応するなら自分でしっかりと学生の本分を全うしないとな」

「……ぅ、痛いところを」
「律はツッコミどころ満載なんだよ。その前だって――」
澪先輩はお説教モードに移行。律先輩は頬を膨らませてそれを聞いているのかいないのかわからない。
いつもどおりの軽音部。
ただ、やっぱり今日は一味違っていて。
「ムギ、ボクの分のお茶を用意してくれないか？」
私の膝の上で寝そべっているキュウべえがそうおねだりをした。
「ええ、すぐ用意するわ」
「ボクは猫舌だから、出来るだけ冷めて渡してくれると助かるよ」
「うん、わかったわ」
溶け込んでる。
たぶん、私以上にこの雰囲気に順応してる。
ほんとうにこの生物は何者なのだろうか？
実は宇宙人で、地球侵略を目論んでいるとか。実はこの体は入れ物なだけで、魂の入れ替えが可能な不死身とか邪悪な設定を持ってそうには思えないだけど、この堂々とした態度を見ると、ちょっとむっとした。
だって、私が先輩方との付き合いを色々悩んでいるのに、みなさんとすごい仲良くて――言ってしまえば羨ましかった。
「どうぞ、キュウべえ。暑さ加減は梓ちゃんにふーふーして調節してもらって」
と、テーブルの上にコップを置くなり、笑顔でキラーパスをかましてくるムギ先輩。
天然なのか狙っているのか。
たぶん、この人の事だから前者に違いない。
「よっこいしょっと」
キュウべえが前足？をテーブルの端へとかけて立ち上がる。後ろ脚がぷるぷる震えているのが可愛い。
私はテーブルの上からキュウべえ用のコップを手にとって息を吹

きかける。
ふーふー。
これで少しは冷めたはず。
キュウべえの顔の前にコップを置いてあげる。
「……持ち上げてくれると助かるよ、梓」
要望の多い生物だなぁ。
そう思いながらも、私はキュウべえの体を両手で優しくもって、コップの中にあるお茶を飲める位置まで持ち上げる。
「ナイスだよ、梓！」
キュウべえは舌をコップの中へ伸ばす。
ぺろぺろとコップ内のお茶を撫でるように舐め、その度に体が上下に揺れた。尻尾の先がちょうど私の二の腕にあたってこしょこしょしてくすぐったさを覚える。
「……まだですか？」
「もうちょっと堪能したいね」
ぺろぺろは続く。そして、こしょこしょも続く。
やがて私はそのくすぐったさに耐え切れなくなって、「あっ」手を離してしまった。
すると、
「あびゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
キュウべえの頭（一部）がコップＩＮ。少し冷ましたとはいえ、それなりの熱さが残るお茶にダイブした結果は言うまでも無い。
「あ、梓ちゃん！　早くキュウべえを！」
そうムギ先輩に言われ、慌ててキュウべえを捕まえてコップから遠ざけるが、既に遅い。
顔はお茶で濡れて、若干焼けどしたように熱くなっていた。
「……君はボクを殺すきかい」
「ごめんなさい」
謝罪する。
申し訳ない気持ちで一杯だ。

わざとじゃないとはいえ、動物虐待をしてしまった。
「大丈夫ですか……？」
「まあ、どうってことはないけれど、次からは気をつけてくれるかな」
ムギ先輩の膝上で顔をタオルで拭かれながらそう苦言を漏らすキュウべえ。
ちなみに他の先輩方の反応はというと。
「だから、律は……」
「うぅ、澪ちゃん許してよぉ」
澪先輩はまだ律先輩にお説教中。
唯先輩はあったかな日差しのせいか、目を瞑って眠っているようだった。
自由すぎるよ。
やっぱり慣れない。というか、
「結局練習してない……」
このままじゃ、駄目だ。
先輩方のペースに飲まれてちゃいけない。私がやらなきゃ、何も始まらないんだ。
「どうしたんだい、梓。ボクに叶えて欲しい願いでも見つかったかい？」
そうキュウべえに言われ、思いつく。
――練習を真面目にする部活にして欲しい。
そんな願いがもし叶うなら……？
このだらけた風景が、私の望んだ姿になるとしたら？
それはいいかもしれない。
けど、
「まずは自分の手でやってみないと」
そう思う。
「君は頑固だね。彼女たちを見習ったらどうだい？」
「先輩方は考えなさすぎです」

「……それは一理あるね。けど、君はそれを自分の手でどうにかできるのかい？　良ければボクが手を貸すこともできるけど……」
「結構です」
断言した。だって、これは私の願いだから。
他人に委ねたりはしない。
これは自分自身のもので、他人に与えてもらうものではないのだ。
「本当に頑固だね」
「……うるさいです」
「やれやれ、契約をとるのも大変だよ。もし、君が自分の手でその願いを成就できないと思ったときはいつでも頼って欲しい。どんな望みでもすぐに叶えてあげるよ」
「それには及ばないです」
「そうかい……じゃあ、ボクはお茶も頂いた事だし、帰らせてもらうよ」
そう言ってキュウベえは音楽準備室の窓から出て行った。
ここは校舎の四階にあるんだけど。その常識的な価値観は魔法少女の使いには適応されないようです。

後日、私はいつもどおり音楽準備室でだらけている先輩方にこう言った。
「本気で練習しましょう！」
お茶会をしてだべって終了の部活なんて同好会以下だ。
目的があるならそれに向かって全力で取り組むべきなんです！
だから、私は言う。
「このままじゃ、駄目です！　もっと、みんな頑張らないと、うまくならないです！」
別に先輩方の演奏が下手だと言っているわけじゃない。ただ、現状維持が許される腕でないのは確かなのだ。
澪先輩は私のその意見に同意してくれて、

「そうだな、最近お茶飲んでばっかりだったし、練習しっかりやらないとな」
そう言ってくれた。
けど、他の人たちは……。
「えー、めんどうくさいよぉ」
「お茶してからでいいじゃんか」
「今日は梓ちゃんの好きなたい焼きよ？」
と、拒否あるいはこちらを誘惑しようとしてきた。
たい焼きは食べたい。私はつぶあん派だけど、クリームでもチーズでも問題なし。食べ方は、尻尾から頂く。
ああ、いいなたい焼き。
ちょっとくらいの休憩ならいいかも。
そう誘惑に屈する寸前の私の前で、澪先輩は宣言する。
「今日は休憩なしだ！　勿体無いけど、たい焼きもなしで！　律も唯も最近全然楽器いじってなかっただろ、食べてばっかりじゃ体がなまって動かなくなるぞ！」
「えー、澪ちゃんお母さんみたい」
「澪ママ怖いよー」
「……たい焼き美味しいのに、いらないの？」
ほんと、この人たちはやる気というものが感じられない。
『ボクと契約すれば、君の願いを叶えることは造作もないだろうさ』
キュウべえの言葉が脳裏をよぎる。
「そんなの、絶対だめ」
「どうした梓？」
「……あ、いえ……なんでもないです」
つい口にしてしまった。
「梓ちゃんもたい焼き食べましょう？」
「う……」
思わず澪先輩を見てしまった。
「どうする、梓？　練習は食べてからにするか？」

「……はい、ちょっとだけゆっくりしてからにします」
結局、こうなってしまうのだった。

第二話／先輩

他のバンドを探そう。
私はそう決心した。
放課後、音楽準備室に寄らずに近所にあるライブハウスへ足を運ぶ。
既にライブは始まっていて、私はチケットを購入し中へ入る。
そこには大勢の人がいて、煌くステージの上で演奏するバンドの人たちがいた。
鳴り響くメロディ。ギター、ドラム、ベース、キーボード。そして、ボーカル。
ちょうど今演奏しているバンドは先輩方と同じ構成だった。
唯先輩よりのギターよりも、律先輩のドラムよりも、澪先輩のベースと同じくらい、ムギ先輩のキーボード以上に――うまい。
ボーカルも耳朶の奥まで澄んだ声届いてきて、音に圧倒される。
私の求めていた音だ。
でも、周囲の人たちのように私はその音に酔えなかった。
代わりに涙が出ていた。
視界が霞む。
どうして自分は泣いているのだろう。他人事のようにそう思う。
横にいた露出度の高いお姉さんが「大丈夫？」と優しく声をかけてくれる。私は「大丈夫です」と涙を手で拭い、注目を浴びる前に出ることにした。
外は、雨が降っていた。
むったんの入ったギターケースに専用のカッパを装着。私用の雨具はないので、濡れて帰るしかない。
急ごう。
そう思っても、足はとろとろとしか動かない。
体が重い。

雨で額に張り付いた前髪が気持ち悪い。
制服もすっかり水を吸ってしまって肌に張り付き、透けてしまっている。
傘を差した同じ学校の生徒二人組みが反対側の歩行者でふざけあっている。
楽しそう。
口では馬鹿にし合ってるけど、それが本気じゃないのは傍から見ていてもわかる。
心と心が通じ合っているから出来る罵倒のし合い。
お互いが信頼できるから、心に踏み込んでいける。
……ああ、そうか。
気付く。
「私は先輩たちとああしたかったんだ」
涙の理由。
他のバンドを見て、そこに入りたいという感想を抱かずに、比較してしまったのは……私が求めていた音だったのに心が躍らなかったのは、私の中でメンバーが既に決まっていたからなんだ。
技術的な音なんかじゃない。
あの新歓ライブで聞いた先輩方の音にはあったんだ。
私が本当に求めるものが。
「戻ろう」
そして、誤ろう。
今日さぼってしまったことを。
私は学校に足を向けた――その途端、
「え」
足元にあったアスファルトが消失した。

気が付くと、私は奇妙な教会の前に立っていた。
奇妙というのはその教会の色がピンクで、まるで陽炎のように揺

れていたから。
何かわからない。怖い。
周囲を見渡しても、他に建築物はない。それどころか空は赤いし、教会を囲うようにして木々が生えている。
森の中なのかもしれないと思った。
「どうしよう」
森の中に入るのは嫌だし、かといってこの教会に入るのもためらう。
夢なら覚めて欲しい。
そう祈ると、
――ぎぃ。
音を立て、教会の扉が開いた。
そして、扉の向こうから出てくるものがあった。
骸骨だ。
人の形をして、手には本を持っている。
骸骨は私の方へ近づいてきた。
……逃げなきゃ。
でも、足が動かない。
ぺたん。
その場で尻餅をついてしまった。
立って、立たないと。
ケタケタケタ。
骸骨の口が動き、歯と歯がこすれ合う音が響く。
怖い、怖い、怖い、怖い……怖い！
体が震えて動かない。
血の気がひいて、寒気がする。
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタ。
もう骸骨との距離は――ない。
空いた手が私の肩を掴もうと伸びてくる。
「っやだ」

私は目を瞑った。
と、
「下がれ、梓！」
閃光を瞼越しに感じた。
恐々と目を開く。
骸骨はいなくなっていた。
代わりに、
「無事か？　梓」
青いドレスを纏った澪先輩がいた。

第三話／ありがとうございます

「澪……先輩？」
地に尻餅をついたままの私の目前に立っているのは紛れもなく澪先輩……だと思う。はっきりと断言できないのはその姿が普段とかけ離れていたから。
澪先輩は制服ではなく、青いドレス――それもフリフリとしたものではなく、動きやすそうな戦うことを意識したような作りの衣装を纏っていた。
魔法少女。
不意にその一語が浮かんだ。
「無事か？」
澪先輩に手を差し伸べられ、ハッとする。
……私、助かったの？
「せ、先輩……私」
震える。
命の危機にあったことを思い出す。
「もう大丈夫だよ、あずにゃん」
背中に暖かな重みが加わった。
背後から手が伸びてきて私の頭が抱えられる。
見えないけどわかる。唯先輩だ。
「間に合ったみたいだな」
「よかったわ。本当に」
律先輩とムギ先輩も登場。二人とも澪先輩と同じような衣装を纏っていた。
律先輩は赤で、ムギ先輩は黄色。
魔法少女の戦闘服……でいいのだろうか。
「じゃあ、私は教会の中にいる魔女を倒してくるよ」
私の頭が理解に追いつくより先に先輩方は話を進めていく。

ただもう恐怖はなかった。
唯先輩がぎゅっとしてくれることで、落ち着けた。
「あたしも付いてくよ」
「一人で平気だ」
「いいじゃん、澪って時々へまするし、一緒のが楽だろー」
「……わかったよ。唯たちは梓をつれて結界を離脱してくれ」
澪先輩と律先輩が教会の中に入っていく。
「あ、待ってっ」
私はその二人の背に声をかけていた。が、届かなかった。二人は教会の空いたままの扉から中へと姿を消した。
「どうしたの、あずにゃん？」
「言い忘れてたんです……ありがとうございますを」
そう、忘れていた。
澪先輩に、律先輩に助けて頂いた礼をするのを。
「じゃあ二人が戻ってきたら言わなきゃね」
「……はい」
唯先輩の言葉に頷いて気付く。
そうだ、私……今日。
「ごめんなさい」
誤らなければいけなかった。
止まったはずの涙がまた出てきてしまった。
「え、ど……どうしたの？　どっかやられちゃってた！？」
「梓ちゃん、大丈夫！？」
唯先輩とムギ先輩が突然泣き出した私に驚く。
本当なら責められてもおかしくないのに、二人は私の心配をしてくれている。そう思うとより悲しくなり、涙が止まらなくなった。
「わ、私……今日、部活……行かなくて……ごめんなさい」
「いいよ」
ぎゅっ。唯先輩が優しく、けれど強く私を抱いた。
あったかくてやわらかい。

「梓ちゃん」
ムギ先輩が私を呼んだ。
その声はいつも以上に穏やかだった。
「はい、どうぞ」
ムギ先輩の手に握られたたい焼き。
「これは？」
「今日のお菓子だったの。梓ちゃん好きだと思って、どうぞ」
「……ありがとうございます」
「ここは危険だから、出ましょう」
「はい」
私は唯先輩とムギ先輩に案内されるまま、結界？を出た。

その後、私たちは澪先輩たちが戻るのを待っていた。
感謝を、謝罪を私はまだしていないから。
でも、いくら経っても二人は帰ってこなかった。

第三話／ありがとうございます（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
ここから物語はダークサイドへ移行。
次回は語り部を変更する予定ですので、お楽しみに！

また感想、指摘など頂ければ幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7260x/

けいおん×マギカ

2011年10月28日10時05分発行